

# 教育の質の向上に関する取組状況

—教育の質の向上・FD活動の推進に向けて—

平成 25 年 3 月

国立大学法人埼玉大学 教育・研究等評価室

## ーはじめにー

埼玉大学では、教育の質の改善を図るため、第2期中期目標・中期計画において、「全学FDガイドラインに基づき、大学が一体となってFD活動を推進すること」、「各学部、研究科のFD委員会はカリキュラム委員会等と密接に連携して教育の質の改善策を図ること」、及び「毎年すべての教員が教育の実施状況について点検した結果を教員活動報告書に記載して提出するとともに、必要な質の改善策を講じること」と定めております。

昨年度に引き続き、教育・研究等評価室では、FD活動の推進及び教育の質の改善に資するため、教員活動報告書に記載していただいた教育の工夫・改善への取組と達成度、反省点をもとに、複数の教員が記載した改善策、課題・問題点を取りまとめ、共有すべき情報としてお知らせすることとしました。今後のFD活動の方策等を検討されるに当たっての一助となることを願っています。

## 工夫・改善への取り組み

### ○指導方法の改善

- 教室入室の際、一人一人に直接封筒を配布する。封筒内には、板書に相当する内容の「板書プリント」が入っている。板書プリントとスライドを見ながら、口頭で講義を行い、授業時間内に板書プリントの要点をノートに写させる。プリントの裏面は、プリントの内容に対応した小テストとなっており、授業時間中にそれらを全て解いて、再び封筒に入れて提出させている。
- 大学院演習において初学者の学習を助け、また全履修者の習得を確実にするために、授業の進行にあわせて専門用語の用語集（グロサリー）を作成させる方法を試みた。
- 授業中に配布する参考資料の多い授業では、今後は教材のクラウド化（WEB上でのデータ共有システム）が必要かもしれない。
- シラバスを見ていない学生も多いようなので、初回に授業の概要や授業計画の詳細を記したプリントを配布し、受講生が全体の流れを見通して授業に臨めるようにした。
- 卒業論文や修士論文の指導では、学生が計画的に研究を進められるよう、週1回のペースでゼミを行った。また、学生からの要望を受け、夏休み期間もゼミを行った。
- ディスカッションしやすい状況を設定するための工夫として、担当学生のイニシアティブを促すほか、座席の並び替え、時事的な問題を扱った資料の配布等を試み、効果があった。
- パワーポイントでのプレゼンテーションにより、写真や図表をさらに用い、教材のビジュアル化をさらに進め、わかりやすさに考慮した。しかし、学生の興味を引くためには、単にビジュアル化するだけでなく、学生自らが作業をするようなことも考える必要が

ある。

- ◆ 教員自身が他大学の授業を聴講して最新の演奏技術を積極的に学ぶ事を継続して行い、教育の改善に努めている。
- ◆ 学生の提出レポートが相互に確認できるシステムを作成(WEB) 及び、メールシステムを利用して、学習内容を受講生に公開し、学習した内容の共通化を図っている。PDF化を図り、学生同士が情報を共有できるシステムを構築した。また、それらがデータベースコンテンツとして利用できるシステムを初めて導入した。
- ◆ 毎回参加者の半分が英語の本を読み、その報告を英語で行うが、今回からその様子をビデオに記録した。これまで少しずつ購入してきたビデオカメラ8台を学生に使わせ、録画する。その映像を空いている時間や休日を利用して視聴し、各自の良かった点、改善すべき点のアドバイスをメールで送信する。毎回合計で45時間を要する。
- ◆ 平成22年度に新しい試みとして行ったインターネットを介した遠隔授業は、今年度も海外出張の折に何度か行った。海外出張中のゼミ指導として行ったものに加え、学部の授業も試みてみた。Skypeというソフトを使って、セミナー室とホテルの部屋で話したが、出張先のアメリカのネット事情が良好であったこともあり、そこそこうまくいったように思う。
- ◆ 演習については、学年の垣根を作らず2年、3年を同じ時間で連続して指導を行うことで、とくに2年生に達成すべき目標を自覚させた。
- ◆ 「見ているだけでは頭に入らない、眠くなる」との学生のコメントから、ペンタブレットを使用し、プレゼン中にリアルタイムで映写スライド中に書き込みができるようにした。
- ◆ 第一線に立つ新進気鋭の若手研究者2名(東大助教と理研研究員)を非常勤講師として招聘して、集中講義を行っていただいた。最先端の研究の話を聴くことで、学生の意欲や士気が多に上がったように思われる。
- ◆ 講義資料・演習問題をWEBで公開したのは有効であった。
- ◆ 過去の学生の意見により、配布資料は必要不可欠な部分のみに限定し最小限にした。
- ◆ 講義内容をわかりやすく記述した教科書を執筆した。教科書を参照することで、学生の理解は格段に向上した。
- ◆ 大学院博士前期課程の学生に関しては、大学院GPの採択に伴って、外部のNPO、国の機関や民間会社と交渉して、学生が自主的に従事するプロジェクトを4件設けさせた。予算請求、帳簿管理等も学生自身に行わせ、社会に即応可能な学生を育てた。その際、常にそれぞれのプロジェクトの進展具合を監視しながら、学生の気付かない点を逐次指示しながら外部との交渉にあたらせた。また、外部の人と定期的に接触を持つことによって、学生の行動パターンの中で将来社会に出た場合に問題になる点に関しての様々な情報を得、それをまた次の指示に反映させていった。
- ◆ 耐震・地震工学の講義では、今年度も講義に埼玉県庁の職員に来てもらい、地域防災計

画と地方自治体の役割について話してもらった。耐震地震工学が実際に政策にどのように生かされているのかや、実際に被災した他自治体に応援にいった話、地方自治体に就職したのちの仕事などについて話してもらったため、受講生には好評であった。

- ◆ 指導を徹底する目的で、二つの実習室を同時に活用することを初めて試みた。実際、授業評価アンケートでは多くの項目で平均を上回る結果となっており、成果が挙げられていると言える。
- ◆ 教科書中の著者の勘違い（無理解）による古い記述などを指摘して正す作業をし、その内容を小テストに出したりしている。研究の本質を理解させるのには良い方法ではあるが、意欲の低い学生には困難な内容であったと思われる。ただ、少数ではあるが、学生の目を開かせることには、一部ではあるが成功していると考えている。
- ◆ オリジナルの講義資料を冊子体にまとめて学生に無料配布した。これらの冊子は標準的な内容を網羅するとともに、痒いところに手の届く、また、通読に値する「教科書」のレベルに達していると考えている。
- ◆ パワーポイント主体で行っていた説明を板書での説明に切り替えたこともあり、伝える情報量が過度になりすぎないものとなった。これを好意的に評価する意見があったとともに、寝る学生がほとんどいなくなった。

### ○オリジナルの評価システム・アンケート等の導入

- ◆ 学生に対して「学生による授業評価」とは別に、授業改善のための独自のアンケートを実施し、より具体的な改善点を見出していきたい。
- ◆ 授業の最後に行う「授業評価」に対する数カ月後のコメント（レスポンスとし回答・公表）ではあまりに間延びしているため、講義の途中に提出を求めたレポート課題とともに回答された「授業に対する感想・要望等」に対して、是は是、非は非と応答し、改善すべき点で、かつ改善可能な点についてはその都度対応したところである
- ◆ 平成 23 年度から 1、2 年次学生それぞれ 4 名程度の学生モニターを配置し、授業や大学全般に対する意見を聴取し、速やかに改善をはかる制度を整えた。他学科の授業内容に関する要望などを速やかに解決できるなどの効用が見られるので、次年度以降定着をはかる。

### ○学生の自主的な学習への取り組み

- ◆ 英語の授業では、小テストを毎回実施した。学生が相互に採点した後に回収してチェックする方式を取り入れ、クラス全体のレベルを学生自身が把握できるようにした（4 年前から継続）。大いに効果がある。
- ◆ 学生が授業時間外の学習に積極的に取り組むようにするにはどうしたらよいかという問題の改善のため、講義授業では学生が発展的研究に取り組みやすいと思われる参考文献をできるだけ多く紹介するように心がけた。また、演習授業では、学生全員に毎回共通

の課題レポートを課し、かつ授業前に参加者全員に対してレポートを送付させるようにした。

- ◆ 自己学習を促す目的で、授業中に行う演習の結果を成績評価に組み込んだ。その結果、多くの学生に自己学習意欲の向上が見られた。
- ◆ 履修した学生に、自分で選んだ外国語の多読を授業期間中に続けるという課題を出した。みな積極的に取り組んでくれて、外国語の学習方法として、適切な素材を選ぶことができれば、自分の学習に応用出来ることを実感してくれたのではないかと思われる。
- ◆ 他学部・低学年・就職活動中などの学生のモチベーションを維持するために、授業時間外に予習復習ができるような副教材を毎週配布し、必要な学生には個人的なサポートを心がけ、グループ活動が中心の授業ではグループ内の連絡やコミュニケーションが確実に行われるよう配慮した。
- ◆ 経験ある高学年の学生と低学年の学生をペアで組ませることによって、学生間の相互サポート態勢を充実させることを心がけた。このように、学生同士のサポート態勢を整えることは、多様な学生を集めた難易度の高い科目ほど成功した。
- ◆ 演習ないし基礎講義科目では、Google+を利用して、授業の開始前に、文献に関する意見をまとめさせるようにした。授業の前に、全員が文献を読み、考察しておく体制を整えることが出来た。実際の議論において、こうした事前コメントを効率的に生かすことには課題が多いように思った。これからの努力目標である。
- ◆ 資料を PDF ファイルにしてブログ上に掲載した。
- ◆ 演習の受講生に「経済学検定試験」の受験を積極的に勧めた。その結果、受講生が自主的に検定試験対策セミナーを開催し、昼休みなどの時間を利用して積極的に学習を行うようになった。
- ◆ 毎回の講義での理解（復習）をすすめる取り組みとして、小テストを実施し、理解また習得できていない項目や部分については、レポートを提出させることにより十分に復習することを求めた。
- ◆ 授業内容の理解を向上させるには、自ら問題を解くことにあるため、講義の最後に演習の時間をとるようにした。
- ◆ 宿題は前半と後半に1回ずつ合計2回出したが、ほとんどの学生が提出してきた。その中でできの悪い問題については、授業中に少し時間を割いて解説を行った。宿題は生徒の理解力を高め、また授業への参加意識を強めるうえで、非常に有用。
- ◆ 講義だけですべてを教えることは無理であり、むしろ講義によって学生にその分野、問題について興味を持たせ、学生が自ら勉強するきっかけを与えることが重要。
- ◆ 自己学習を促す目的で、授業中に行う演習の結果を成績評価に組み込んだ。その結果、多くの学生に自己学習意欲の向上が見られた。
- ◆ C 言語のプログラム作成、その他の実演を動画にして、それを教材としてネット上で示し、随時閲覧可能なようにした。

- ◆ 小テスト／中間・期末試験の正解は WEB で掲示し、講義時の音声も mp3 ファイルとして WEB 上で公開することにより、自宅において復習・ノートの整理をすることが可能な環境を提供した（なお、板書プリント自体は WEB 上で掲示しない。これにより、生ライブとしての講義に参加することが受講者の利益に適うことになる）。また、公開した自身の講義の音声を聞き直すことにより、自分自身の声の聞き取りづらい部分を見つけ、聴衆の理解しやすい言い直し・スピードにするように努めた。
- ◆ 授業では、復習、予習をしっかりと行ってもらうように、毎週プリント問題を配布し次週に解答を配布するという方法をとった。しかし、結局問題をまじめにコツコツと解いている学生にはそれなりの効果があったが、そうでない学生には単なる紙屑となったようである。
- ◆ 故意に資料を配布せずに授業を行った。授業では教科書を指定しているが、教科書に記載以外の内容についても授業で解説をした。その際には、学生の授業に対する集中の仕方が違っていたように感じた。また、単純に比較できないが、中間試験や期末試験の結果も例年よりもよくなっていた。このことから、資料の配布はしないほうが学生の授業に対する理解が進むのではないかと思われる。
- ◆ 2回に1回の割合で課題を出し、レポートとして提出させた。これは演習問題を解かせるものであったが、学生はこれが勉強になったといていた。
- ◆ ほぼ毎回のレポートとその解答を説明することにより学生の理解度の向上を図った。また、問題と解答を WEB で公開し、学生の自宅等での学習の助けとした。また、昨年度より、授業内容を電子ファイルとして WEB で公開し、学生の復習の一助となるようにした。

## ○教育のグローバル化

- ◆ 学部では有志を中心とした1日英語漬けセミナー、大学院では定期的な読書会や研究論文作成の個別指導を行っている。
- ◆ 実際に学生を人々の生活の場に連れて行き、その生活について自分の見聞に基づいて考察してもらうこと、特に日本とは異なる環境の外国に連れて行くことの重要性を考慮し、新たに実習をもうけ、学生をモンゴルに引率した。
- ◆ 院生の国際的レベルでの研究を支援するために、D2を教員と研究協力関係にあるポーランドのセンターへ短期留学に推薦し、3ヶ月の研究を遂行させた。
- ◆ 海外の大学でよく使われる標準的な英語テキストを毎学期使用することで、学生が将来的に開発や国際関係の場で外国人と仕事をしたり、専門の大学院に行く場合の準備にもなるよう、海外に出たときに当然に知っておくべき標準的な知識はもちろん、その背景となる一般常識も身につける機会を提供するように心がけている。
- ◆ 大学院の輪講では、報告資料の作成などを基本的に英語で作成することとし、「論文に使う文章を英語で書ける学生」を育成することを目指している。→ 平成17年度から始め

たが成果があがりつつある。英語の報告資料のファイルをもらって添削して返しており、英語力向上に結びついている。

- ◆ 4年生(卒研究生)には学会発表を義務付け、修士学生には英語学術論文の海外誌掲載を課している。例年、研究室として学会発表 20 件、論文 10 報を目指しているが、このノルマを本年は大きく上回った。
- ◆ 埼玉大学の学生は英語の能力が非常に貧弱であるので、できる限り英語の資料を用意し、語学能力の向上にも努めた。論文に対するディスカッションも日本語ではなく基本的に英語でおこなうよう指導した。
- ◆ 資料収集では、海外の最新情報を取り入れることに心がけ、学生がグローバルな視野で学習に取り組むように配慮した。
- ◆ 本年度は英語での科学プレゼンテーションスキルを身につけることを目的とし、データの説明方法、質疑応答の方法などに関して演習を行った。また、英語講演の聞き取りも行った。
- ◆ 生物英語では、生化学の教科書を英語で読む点は昨年度と同様であるが、新たな試みとして、英作文演習を積極的に取り入れた。この試みは、専門用語の綴りを覚える、使い方を覚える、という新たな問題意識が学生の中に生じた点で成功であった。
- ◆ 大学院の英語の講義についても、昨年度と同様に高い評価を得ている。これは ICGP 活動の一環で実施したネイティブスピーカーによる講義評価に大いに成果を負っているものであり、学生とのインタラクティブな講義へ良好に改善が図れているものと思われる。
- ◆ 学部生や博士前期課程の大学院低学年生の研究成果をまとめさせて、国際会議での口頭発表、国内と国際学術誌への投稿を指導し、彼らの専門知識のみならず、語学力の向上などについても着実な成果を上げています。
- ◆ 先端的な生命科学の分野から、学生に自ら課題を設定させ、リサーチした結果を英語でパワーポイントスライドにまとめさせた。英語でプレゼンテーションを行わせ、英語でディスカッションを行った。英語だけでの学部講義は当学科初の試みであったが、受講生はすべて熱心に取り組み、英語によるプレゼン能力やディベート能力が回を重ねるに従い向上していくのが見て取れた。受講生のうち 2 名は夏期休暇を利用して海外に短期語学留学に行き、1 名は国内の英語ビジネススクールに通うようになった。

### ○レポートの作成に関する取り組み

- ◆ リサーチペーパーの完成を課す演習では、レポートのドラフトをピア・レビューアールと教員にまず提出し、訂正箇所やコメントを得、それを反映したものを最終的に出すことを求めた。結果、レポートの質はあがったようである。
- ◆ 実験では、レポートの作成過程を各自の PC で経験してもらい、レポート作成の基本を学習してもらった。依然として大学入学後に科学的記述・レポートの作成の実際を学ぶ

カリキュラムがないことは問題で、その点をカバーする試みである。

- ◆ 文献検索、論文の書き方の講習会を講義中に毎年実施してきているが、2011年度も実施した。この時間を取らないと、形式的に整ったレポートが作成できないという問題点がこれまで続いていたが、2011年の年度末に、ドクター、マスター、学部のカリキュラム委員が協力して、マニュアル化したので、今後、レポートの書き方の説明時間を短縮できることを期待する。
- ◆ 実験終了後は実験ごとにレポートを課し、添削・採点后レポートを返却することで、実験レポートの作成方法についても指導を行なった。また、レポートの一部をプレゼンテーションしてもらい試みも行った。これは、データの提示の仕方や考察などについて、その場で指導が可能で、また学生も、異なる班の発表を聞くことで得るものが大きかったと考えている。
- ◆ レポート作成に関する個別指導を実験後に行った。その結果、レポート提出率の向上及びレポート内容の改善が見られ、学生実験の単位の取得率が上昇した。

## 要望・問題点

### ○施設・設備の改善について

- ◆ 授業内容については、例年 15 回かけて講義している内容を、授業期間短縮に伴い、13 回に圧縮して行った。恐らくこのため、「学生による授業評価」において、「説明が早すぎる」との不満が出た。これはまた、講義室の設備がスクリーンしかないことにも原因があると思われる。この点に関しては、次年度に設備機器が更新され、学生 2 人につき 1 台のモニターが設置されることから、相当程度、不満は解消されるものと期待している。
- ◆ 夜遅くまで大人数がグループ学習を行うこともまれでなく、そうした自主学習を行う場（教室など）が極めて制限されていることに学生の不満が高かった。自習は個人で静粛に行うとは限らない。議論を重ねての自習もあるので、教務方には時間外の教室使用について柔軟な対応を切に望みたい。
- ◆ マイクが故障していて聞き取りにくいという苦情があった。これについては授業中に全学教育課に修理を依頼したが、なかなか改善されなかった。
- ◆ 器具が不足しているという指摘があった。これはもっともなことなので、理学部環境整備基金等を利用しつつ、学科と相談して順次、整備していく予定である。

### ○学生の学力低下

- ◆ 補習・自習を促すものの、学生の理解度を押し量りつつ、結果として無意識的に授業の難易度が下がっていた点を反省したい。

- ◆ 大人数の授業では、学生の注意・集中力が落ちていること等を考慮し、取り扱う学習課題と学習活動の大幅な精選を行った。その結果、取り扱う課題の分量は前年度の約 80%、5 年前の半分となった。
- ◆ 学生が高校時代までに修得してきている知識が非常に貧弱になってきていると感じている。これを補うため、教育内容に関連する基礎的な科学を盛り込みながら授業をするようにしている。そのため、従来より授業時間が長く必要になっている。
- ◆ 学生の質が変化しているのは明らかで、大学全体としてのそれへの対応が必要。
- ◆ 双方向的授業を投げかけても反応はなく、宿題は他人まかせで書き写して来るだけ、毎回の小テストはできないままで、できるように努力する意欲も方法も身に付いていない。それと同時に、高校レベルの力学を一応マスターして来ている学生にもそのようなレベルの教育に付き合わせているカリキュラムをどうにか改善できないかと悩んでいる。

## ○学生の授業態度

- ◆ 授業中の態度が悪い学生グループに対してきつめに注意すると、逆ギレ・逆恨みされるのにはどのように対処したらよいのか模索中。
- ◆ 学生からは「マナーに非常に厳しい先生」ととらえられているようであるが、このマナー教育を徹底したことで、ようやく医療機関での実習が可能になっているのが現状である。毎年、学生のマナーが悪くなっているのも、その教育の重要性がますます重要になると思われる。
- ◆ 一切の選抜を行わず受け入れた面々によるゼミが数年続いているが、発表週の無断欠席、連続 3 回以上の欠席など、およそゼミとしてあつてはならないことが続いた。平成 23 年度が特にひどく、根本的に「ゼミの課題をその場で割り当てる」という当たり前のことができなくなってしまい、ゼミ内容に連続性を欠く事態となった。
- ◆ 最近、レポート提出の期限を守れない事例が急増している。当該実験を担当している教員で対応策を検討した。協議の結果、遅れ日数に拘わらず、一応レポートを採点する（もちろん遅れ程度に応じて減点する）という教員側の姿勢を改め、提出期限に遅れたレポートは受理しないことにした。
- ◆ ただちゃんと聞いている受講者と講義途中で入ってきたり出席をとったあと、出ていってしまう受講者も見られた。講義後の受講者アンケートでは真面目な受講者からの不まじめな受講者に対する不満が見られた、来年度は毎回の講義終了時にコメント票を配布し記入・回収するなど何らかの手を打とうと思う。
- ◆ 年々「自分でものを考え、自分の手で字を書く力（これらは相関がある）」が低下しているように思う。新生生の多くは比較的真摯に対応しているが、2 年次以降は継続する者が減る傾向にある。履修者の一部に、特に後方の座席で睡眠したり他のレポートに向ったりする学生がいる。さすがにしゃべり続ける等、他に迷惑となる行為は影を潜めたが（かつては睨んで注意していた）。

- ◆ 授業の板書やプロジェクタの映像を携帯電話のカメラなどで撮影し、ノートに書かない学生もいる。このような学生への対応をどうすべきかが今後問題になると思う。

## ○授業評価について

- ◆ ある学生が、授業評価に「この教員は自分の考えを押し付けている」と記述していたので、学生の中には、講義中の発言や行動を総体的に結び付けて深く考えられない者がいることが分かった。
- ◆ 学生による授業評価は、実質的な授業改善にはまったく役立たなかった。むしろ、教員側の授業に対するモチベーションの低下を招くものとして、たいへん危険であった。そもそも、評価者が誰か特定できないような現行の評価システムはその評価結果の信頼性がほとんどない。
- ◆ 数年来の改良の根幹には「平易化」要望への配慮があるが、そろそろ限界にきていると考えている。平易化は、それが『安楽願望』から発している場合、際限のない墮落に陥る。学生の授業評価への対応を常に学生サイドから見るのは間違いであることの一例証である。教員は学生の評価を取り入れる部分と超然と無視する部分が必要である。
- ◆ スピードの速い授業や板書の多い授業があたかも悪い授業であるように学生たちが思ってしまうのであれば、授業アンケートの中身も考慮すべきであろう。また、例年授業アンケートでは学生の積極的な授業への参加が足りないとの評価を受けているので、今年度も問いかけを増やして考えさせる時間を設けた。しかし、このようなアンケート項目は少人数教育でのみ意味のある項目で、それにより当方の授業の評価が低く見なされるのは不愉快である。
- ◆ 演習の時間も全然足りないので、授業時間を大幅に延長し、徹底的に問題を解かせた。この観点から、授業評価は実際に授業を行う上で無駄どころか邪魔でしかない。なぜなら、こちらとしては好意で授業時間を大幅に延長して演習問題を解かせているのに、「授業は時間通りに行われましたか」などという人の努力を愚弄する項目を設けたまま文言を変えないからである。

## ○消極的な学習姿勢

- ◆ 学生の科学的な文章の作成能力が低いので、なるべく実験レポートを丁寧に添削し、早く返却し、学生へ速やかにフィードバックさせることを試みた。それ自体は達成できたが、学生側で実際にどれくらいフィードバックできたかは不明。むしろ、学生にとって返却されたレポートはあまり振りかえられておらず、それで終わりになってしまっている印象がする。今後どのようにフィードバックさせるのが効果的なのかを考えていきたい。
- ◆ 授業の2倍の自習時間をと説明し、そのペースで進めたいが、実際それだけ自習をしてくる学生は少ない。

- ◆ 学部学生への講義においては、化学全般に関する基礎知識と専門的な知識をわかりやすく説明する努力をし、学生の理解を促した。しかし、その効果はあまり期待できなかった。その原因は、学生各自が講義内容を理解しようとする努力が不足していることによるものである。これは大きな問題であり、さらなる講義の工夫が必要であるが、講義を受講する学生の態度に積極性を促す努力が必要であることがわかった。
- ◆ 学生の自発的質問から始められる授業において、自分がわからなかったことに対して、十分な理解が得られないまま授業を終えている学生がいる。
- ◆ 学生の抽象的思考力の低下が見て取れるが、「わからない」という一方、オフィスアワーに質問に来ないなど、わからないことをそのままにする学生が増えてきた。
- ◆ 期末試験では自由に自分で問題を設定して、解答させる問題も出したが、自発的な勉強の形跡が見られたものは大変少ない。
- ◆ 教科書を購入する者は年々減少の一途を辿っており、教科書を持っていても全く開かない学生が多くなっている。講義中にとりあげ回覧する参考図書には興味を示さない気配もある。
- ◆ 授業内容周辺の資料を配布すべきとの意見には少々がっかりした。講義では参考文献が記されている教科書を使用しており、自分で調べられるはずである。資料が与えられるのを待っている姿勢は、自主的に研究に取り組むべき大学院生としていかがかと思う。
- ◆ 昨年度まで実施していた技術職員の授業補助は、今年度はとりやめた。これは、学生が個別に「教員に聞く」、「その場で教員に評価を受ける」という学習姿勢が身に付いていなかったためである。学生は、わからない点は適当にお茶を濁してしまい、自己評価を行うことが無い。
- ◆ 授業への参加意識を高めるために、昨年度よりディベートの回数を多くする変更も行った。ただし、学生の受講態度に変化が見られる。主体的に授業に関わって行こうとする姿勢が無くなってきている。
- ◆ 毎回、課題を明確な形で与えるべきかもしれないが、課題をもらわなければ自分では勉強しないというのも困ったものである
- ◆ 課題をあまりださなかったため、学生が復習をあまりせず、その場では理解していても、後になってみるとよくわからないということがあったようである。

## ○その他の問題点

- ◆ 教養学部生について、入学前に第二外国語を選択するシステムは再考できないだろうか（入学後の働きかけができない）。
- ◆ 専門分野の教員のいない、「古代史」や「中世史」で卒論を書く学生や、「オーストリア＝ハンガリー帝国史」で修士論文を書く大学院生について、指導を担当することとなり、苦勞した。専門の研究分野でないからといって指導の質が低下しないよう、最新の研究動向を渉猟し、きめ細やかな教育ができるよう努力した結果、1名の指導学生が大学院

に進学でき、また修士大学院生も優秀な修士論文を完成し、学位記受領代表者として顕彰してもらうことができた。しかし、フランス語圏の歴史が研究対象である教員にとっては、英語はともかく、ラテン語、ドイツ語などの史料の読解を指導するのは、非常に手間と時間がかかったので、とくに、専門の教員のいない分野の大学院生の指導をどのように行うかについて、今後、工夫・改善していく必要がある。

- ◆ 現状、学生は情報リテラシーの差が大きく説明に時間を要する場合も多い。情報リテラシーに関して入学後一定期間教育を行うなどの改善が必要。
- ◆ 授業評価で自宅学習の乏しさが指摘されているが、授業によって、事前学習や事後学習を要するものと、必要としないものがあり、一律な対応は難しい。